

シリーズ 私の一冊の本

環境科学研究所 吉岡寿 先生

井上靖著 『天平の薨』

閲覧室 2 階 913.6/1 57 新潮社 出版

この夏、静岡県立美術館で「国宝鑑真和上展」が開催された。鑑真は、中国の唐の時代の高名な僧であり、天平時代の日本に来朝し、唐招提寺を開き、仏教の戒律を広めた人として歴史で学ぶことになっている。しかし、私のような、理系で、どちらかと言えば無神論者に近い人間にとって、鑑真は特に興味を引く人物ではなく、頭の片隅のどこかに、その名前が残っているにすぎなかった。鑑真とその時代に興味を持たされたのは、井上靖の『天平の薨』を読んでからである。二十代の後半だったような気がする。この本の主人公は鑑真ではなく、鑑真の来日を働きかけた日本の留学僧やその仲間であるが、色々なタイプの留学僧が登場し、それぞれが異なった価値観、人生観を持って生きて行く。その生き方が淡々とはあるが、鮮やかに描きだされているのが印象的だった。

私が学生の頃は昭和 30 年代の後半であり、まだ戦後を引きずっており、大学は学生運動が盛んな時代であった。授業を放棄して街中にデモに出かけるということもしばしば行われ、理系の学生と謂えども政治や社会と無関係では居れなかった。そういう時代の風潮は、何の為に科学を学ぶのか、という命題を私達に突きつけてきた。私自身はあまり政治的な活動が出来る人間ではなく、常にそのような状況から一歩離れて生きてきたが、自分が自然科学を学んでいることに、何か理由付けをしなければならない、という一種脅迫観念に近いようなものを、ずっと感じていた。

天平の薨では、主人公である普照という僧は、純粹に学問好きであり、真理を究める為に、仏教を学び、唐に留学することにも、そこに学ぶ価値を持ったものがあるかどうか、という主観的な立場で判断するような男である。栄叡という僧は、仏教を国家体制を安定化する手段として利用することを考え、その為に鑑真を日本に招こうとする。戒融という僧は、唐という国が強力で豊かに栄えているが、その一方で多くの貧しい人民が国中を流浪しているのを見て、留学僧として学ぶ自分の立場に疑問を持つ。そこには学問と色々な形で関わりあう、典型的な人間像が描かれている。その他にも何人かの留学僧が登場するが、彼らは全てが、強い意志を持って人生を生き続けているわけではないし、純粹な学問の徒でもない。しかし、なぜか夫々の生き方に共鳴してしまう。この中で目的を果たして無事に日本に帰国できるのは、主人公のみであり、ある者は唐で客死し、ある者は帰国の遣唐船が難破して死んでしまう。この小説はまるで挫折していく人間を描くことが主題のようにも思えるが、暗さを感じないのは、各人がそれなりに一生懸命に生きる姿が描かれているからだろう。

私は『天平の薨』を読んだときに、幾分ほっとした気分になったことを記憶している。口幅ったい言い方をすれば、そこに自分の生き方と感情に共通するものがあつたからかも知れない。「国宝鑑真和上展」を見た後、天平の薨を何十年振りかで読み直して見た。読後感は昔と変わらなかった。現代の学生気質は、私たちの時代とは余りにも違い過ぎる。この本が時代にマッチしているとは思わないが、出来れば今の学生にも読んでもらいたいと思う。